

(1)みことば

「栄光を見る」

聖書 ヨハネによる福音書 第1章14節

愛宕町教会牧師 穴戸俊介

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

(ヨハネによる福音書1・14)

ヨハネによる福音書のクリスマスの記事は独特です。幼子の誕生の次第を伝えるのではなく、神様の独り子がこの世にお生まれになったことの意味を伝えようとしているからでしょう。

御子が救い主キリストとしてお生まれになったことで、わたしたちに神様の温かな栄光が示されたと、福音書記者ヨハネは語ります。

自分たちはその栄光を「見た」と言うのです。さらにその栄光についての説明を彼は試みます。

それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

と言います。「恵みと真理に満ちた栄光」とはどういう光でしょうか。

オランダの画家レンブラントは、この光を巧みに描いた画家として知られています。「レンブラント光線」と言われる場合もありますが、彼の描く降誕の絵画では、飼い葉桶を見つめる人々の顔が、光を反射して喜びに輝くような仕方で描かれます。神様の恵みと真理は、それに出会う人間の顔を輝かせ、喜びを満たすに違いないという画家の信仰が絵の中に描き出されるのです。

福音書では、神様の栄光が「恵みと真理に満ちた」ものであると言われますが、一方、ヨハネの手紙の中ではこのように述べられています。

初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。

(ヨハネの手紙一1・1)

わたしたちがイエスから既に聞いていて、あなたがたに伝える知らせとは、神は光であり、神には闇が全くないということです。

(ヨハネの手紙一1・5)

ヨハネの手紙でも命の言と光が手紙の最初に出てきます。

「命の言」を自分たちは確かに聞いた。目で見えた。よく見て、手で触れて確かめた。そして、その聞かされたことによれば、神様は光であり、闇が全くない。――ヨハネの手紙では、光は神様に由来するものと言われます。神様ご自身が光そのものであって、神様には闇がないということです。

この言葉は、神様をどう知ることか、どう把握し、どう理解できるのかということをお教えるように思います。

神様が光そのものであり、闇が全くない方だということであれば、太陽そのものを見詰められないように、神様その方を見詰めたり観察したりすることも、人間にはできないはずで

す。

主イエスは生まれつき、神様の独り子としての栄光を帯びておられたとヨハネは語るのですが、同じ福音書の中で、主イエスはしきりと「栄光を受ける時」が来ることを弟子たちに語ります。この「栄光を受ける時」は、主イエスが十字架にお掛かりになる時を表わしています。

神様の恵みと真理に満ちた光は――思いがけないことですが――、十字架の上から射し込みます。十字架の上から輝き出た光が、わたしたちを照らし、わたしたちの姿をありのまま明るみに出すのです。

レンブラントが描いた絵画は、光そのものではなく、光に照らされた人間の姿です。神様は光そのものですが、人間には様々な陰影があり、それが絵の上に描き出されます。様々な失敗を繰り返し、罪を犯し、破れと悲しみと疲れを負っている人間の姿が、それでも光の中に置かれている者として明るく照らし出されるのです。

独り子としての栄光に満ちた主は、罪人たちの姿を明るく照らし出し、十字架によって罪を清算し、赦しの中に置いてくださいます。真の赦しの光が、わたしたちの上に明るく温かく輝いていることを憶えたいのです。

(2)2023年 教会全体研修会

教会の交わり

交わりコーナーの再開も考えて～聖書的な視点から

《講師》 穴戸俊介 牧師（愛宕町教会）

2023年8月20日（日）礼拝後～3時《講演・分団・全体会》

聖書

詩編133編

【都に上る歌。ダビデの詩。】

見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び。かぐわしい油が頭に注がれ、ひげに滴り 衣の襟に垂れるアロンのひげに滴り
ヘルモンにおく露のように シオンの山々に滴り落ちる。シオンで、主は布告された祝福と、とこしえの命を。

讃美歌 358番

【講演】

はじめに

今回の主題は、「教会の交わり」という題で、その下に「交わりコーナーの再開も考えて～聖書的な視点から」という副題が付けられています。これは、目下の教会の状況下で、今後どのように歩んだら良いのかという、実際的な課題を憶えて立てられた主題です。しかし、難しい主題だなと感じています。

2020年1月から始まった新型コロナウイルス流行の中で、愛宕町教会は、なるべく通常の教会活動を縮小しないで行おうと努力をしてきました。けれども、そんな中で唯一、縮小せざるを得なかったことがありました。それが「交わりコーナー」コイノニアの食事です。当時の風潮では、同じ部屋に一緒にいてもいけないという雰囲気でした。実際には、コロナウイルスは飛沫感染をするのであって、呼吸器系に気をつければ、消化器系からは感染しないこ

とが、かなり早い時期に知られていたのですが、食事する時には、マスクを外さなければなりません。加えて、愛宕町教会のように、お互い同士がごく親しく教会で食事をすると考えた場合、黙食することは、明らかに無理だろうということも想像できました。ですので、毎週食事を共にしていたコイノニアの交わりだけは中断せざるを得ず、それが3年半以上にもわたっています。

元々のコイノニアは愛宕町教会の教会生活の中で非常に良い働きをしていた訳ですが、目下の状況下で、これからの教会の交わりをどのように築いていくのが良いだろうかという問いがあるわけです。

★

一方には、一当然の思いですが一できれば以前と同じように昼食を共にしたいという思いがあります。実はその第一歩として、今日は午後の時間帯にこの研修会を計画したのでした。礼拝と研修会の間に昼食の時間を設けました。先ほどの昼食は、本当に久しぶりに教会全体で過ごした昼食の時間です。皆さんはどんな風な思いで昼食の時をお過ごしになったでしょうか。後ほどの分団でお話し頂けたら良いなと思っております。

一方に教会全体で食事を取りたい願いがあることは確かなのですが、しかし、この期間のわたしたちの過ごし方は、一人ひとりが皆違う状況下を過ごしてきています。すぐにでもお昼を再開して欲しいという願いが一方にあるのですが、そんな風に比較的大らかに物を考えられる人たちがばかりではないというのも、また目下の実情だろうと思うのです。

たとえば、長い間施設から出ることを許されずに来た方々がいらっしゃいます。ようやく世の中の動向によって、外出することまでは認められました。けれども、「教会の礼拝に来たら、その後一週間は施設の隔離室で一人きりの生活をするように義務付けられている。そのことを覚悟して礼拝にやって来る」という状況下にある方が現にいらっしゃいます。礼拝にやって来ることでさえ、そんな風に施設側からは警戒されているわけですから、食事を共にすることは、きっととてもハードルが高くなることでしょう。もしかすると、「そのようなプログラムがあるのなら、教会には行かせられない」とでも言われてしまえば、せっかく開かれた門戸がまた閉ざされることになりかねません。

また、そこまでの犠牲を実際に払うことはありませんけれども、気分の問題として、多くの人混みの中に身を置くことに抵抗を感じる方、まして食事まで一緒にすることは、これをやって良いのだろうかとかためらいを感じる方も、あるいはいらっしゃるのではないのでしょうか。そんな風に、新型コロナウイルスをきっかけにわたしたちの間には、お互いが交わりを持つことやその交わり方について、さまざまな感じ方の違いがあることが浮き彫りとなってしまっているのです。

さらに、別の問題もあります。仮にコイノニアを再開するとして、しかし三年半休んでいた間に、わたしたちはそれぞれに年を重ねてしまいました。婦人会でコイノニアの食事の再開についてのアンケートを取ってくださったと伺っていますが、その回答を見ても、とても以前と同じように食事をサービスするのは無理ではないかという結果が出ているとも伺っています。食事を共にすることへの前向きな思いとためらいとが両方あり、なおかつ、もし交わりコーナーを再開するとすれば、これをどのようにして行っていったら良いかという問いもあります。それが現状の愛宕町教会の姿であるように思うのです。

★

すると一体、どうしたら良いのでしょうか。このまま交わりコーナーを行わず、皆で食事を取ることは止めにして、もう教会の交わりは礼拝だけと割り切ることが良いのでしょうか。後ほどの分団で、そのことをお話しただいても良いかなとも思うのですが、都会に

は、主日礼拝が終わった後、教会員が30分以内に教会堂を出て、後は次の日曜日まで会堂の扉を施錠するという教会も実際にあるようです。

しかし、もしもそんな極端なことを山梨でやれば、あっという間に教会は衰えてしまうに違いありません。それに、そういう礼拝中心の交わりというのは、言葉の上では「礼拝が中心である」という風に言えば響きは良いのですが、果たして本当にそれが聖書に出てくる教会の姿だろうかということを考えると、少し疑問に感じられる点もあるのです。

1 「教会」(エクレシア)とは

というのは、聖書の中で「教会」と訳されている言葉は、元々はギリシャ語で「エクレシア」という言葉、またヘブライ語では「カーハール」という言葉なのですが、いずれも「集会」をあらわす言葉だからです。もちろん、礼拝だけに集まる教会にも言い分はあるだろうとは思いますが、聖書に言われている「集会」というのは、神様を礼拝し、神様の民となって生きるために集まるという意味であって、そこでは世俗の集まりのことが考えられている訳ではない、だから礼拝だけで良いのだという風に、「礼拝のみで良い」と考える教会はきっと主張するだろうと思います。そして、そういう主張をすることは、言葉の上で、また理屈の上では可能だと思います。

ですが、その場合に忘れられてはならない大切な事柄があります。それは、キリスト教信仰が、元々個人の悟りのようなものではないということです。日曜日にわたしたちが教会に集まるのは、決して自分一人だけがこの場所で神様をたたえたり、神様にお祈りしたりするためではないのです。たまたま神様が好き、イエス様が好きな人たちが同じ場所に集まって、銘々それぞれに聖書の言葉を聞き、思い思いのことを祈り、また讃美歌を歌って良い気分になって帰って行くのが教会の礼拝ではありません。教会の信仰は個人の思いではなくて、教会の群れの中に生活として受け継がれてゆくものなのです。

以前、わたしがまだ信徒だった時分に、わたしが通っていた教会の牧師先生は、こんな言葉でそのことを教えてくださったことを憶えています。「キリスト教会というのは、イエス様のファンクラブではない」とおっしゃいました。もし教会が、たまたまイエス様を好きな人が集まり、同好会のようにファンクラブを結成しているのであれば、イエス様に飽きてしまえば、集まっていた人は去り、ファンクラブも解散することになります。実際、世の中の多くの芸能人やアイドルを巡るファンクラブは、そのような道を辿ります。人気者の芸能人やアイドルが登場すると、そのことに気づいて気に入った人たちがファンとなり、ファンクラブを結成します。会員番号が与えられ、一桁とか二桁の番号を持つ人たちは、芸能人本人に近い古くからのファンとして、ファンクラブの中で尊重されたりします。しかし、そういうクラブは決して永久に続く訳ではありません。何よりも芸能人本人が衰えますし、ファンたちも年齢を重ねて次第にくたびれて行きます。あるいは本人たちにはまだまだやる気があっても、社会的に人気がなくなり、もうそれ以上ファンクラブを存続できなくなるということもあります。

外側から見れば、教会に集まっている人たちもイエス様のファンクラブに似たもののように思われてしまう場合があるかも知れません。でも、実際には違うのです。

これは、昨年の全体研修会で申し上げたことにもつながるのですが、教会はキリストの体であり、また教会の頭はキリストであって、体と頭は互いに一つに結び合っているものなのです。その点がファンクラブと全く違う点です。芸能人のファンクラブとキリスト教会が違っている点はいくつも挙げられるでしょうが、その中の決定的な違いは、教会というものが、人間同士の集まりに解消されないという点にあります。

ファンクラブが永遠に続かないのは、集まっている人たちも、また、その人たちが集まっ

て自分たちのアイドル、つまり偶像に祀り上げられている人物も、所詮は人間に過ぎないからです。人間の営みは、一時は華やかそうに見えても限りがあり、滅んで行きます。教会は違うのです。教会には確かな頭となる方がいらっしやいます。そしてこの方は、死を通して復活され、今も生きておられる永遠の方なのです。

ですから、教会の交わりという事柄を考える時には、そこに集まっている人間からは始まらないのです。人間が数十人集まるうとも、その規模が何百人、さらに何千、何万人に拡大しようとも、もしもそれが、ただ人間が集まっているだけということであるのならば、それが教会になることはありえません。人間の創造力や人間の幻想が教会を生み出すのではないからです。

★

このことは、新約聖書の福音書や使徒言行録を読んでも、まさにその通りだと言わなければなりません。イエス様がガリラヤで伝道なさった時、多くの人々がイエス様の教えやいやしの業などを通じて、イエス様を慕い、後を追うようになりました。いわゆる「群衆」と呼ばれる人たちが、イエス様の後を追いかけるようになりました。

表現としては多分に誇張があるとは思いますが、マルコによる福音書1章33節には、「町中の人々が、戸口に集まった」と言われたり、ヨハネによる福音書12章19節では、主イエスに敵対していたファリサイ派の人たちが、「見よ、何をしても無駄だ。世をあげてあの男について行ったではないか」と話し合ったりしています。そういう言葉を聞くと、実際の規模がどのようなものであったか分かりませんが、少なくともその時点では、主イエスに、この世のアイドルのような勢いがあったことが分かります。人間がイエス様を祀り上げようとするエネルギーがその時点では確かにありました。しかし、その勢いが直接キリスト教会につながった訳ではないのです。

よく知られているように、イエス様の周囲にたむろしていた群衆は、やがてイエス様に飽きて、イエス様から離れて行きました。一時はイエス様に夢中になっていた人々が、イエス様の話を聞いて、「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか」と言って、イエス様のもとから離れ去ったことが、ヨハネによる福音書6章60節に出てきます。人はいつも移り気です。以前は喜んで聞いた話であっても、すぐそれに飽きたり、反発したりするようになります。

このことは、主イエスの復活を伝えて旅をしたパウロたちも、まさに同じような経験をさせられています。ピシディア州のアンティオキアという町で主イエスのことを宣べ伝えた時、最初の機会には大変喜ばれ、ぜひ次の週にもその話の続きを聞かせて欲しいとせがまれ、それどころか、会堂からパウロたちの泊まっていた宿舎まで追いかけてきて話を聞きたがった熱心な人々がいました。ところが次の週になると、手のひらを返したように迫害を加えられたという記事が使徒言行録13章42節以下に出てきます。

主イエスご自身も、またイエス様のことを宣べ伝えた教会も、人間の思いがどんなに移り気で、手のひら返しを平気でするかということをよく知っています。「イエスは、何が人間の心の中にあるかをよく知っておられた」とヨハネによる福音書2章25節に言われていますが、イエス様の場合で言うと、群衆が去って、最後にはわずかな弟子たちだけが主イエスに従うようになります。ところが、そんなにも熱心に従っていた弟子たちに、イエス様は、「あなたがたはきっとわたしを裏切ることになる。そして、わたしは十字架に掛けられ、殺されるけれども、三日目に復活する」ということを、何度も何度も話して聞かせました。

弟子たちは、イエス様から話を聞かされた当座は、そんなことが実際に起こるとは信じられず、イエス様の言葉を悲しい気持ちで聞いていました。彼らとしては、最後までイエス様

をお守りし、従うつもりでいたのです。ところが実際にイエス様が逮捕されてしまうと、皆、逃げ散ってしまいます。まさにイエス様のおっしゃった通りになり、とうとう誰もイエス様のもとに残りませんでした。イエス様はただお独りで敵の手に落ち、十字架にはりつけにされて行きます。その時点で、イエス様に従おうとする弟子たち一人間の側の主イエスに従おうとする企ては、完全に頓挫したのです。

ところが、復活したイエス様の方が、そんな情けないあり方をした弟子たちを一人ひとり探し出してくださり、ご自身が確かに復活し、生きる方となって、弟子たちと共にいてくださることを教えてくださり、一度は躓いてしまった弟子たちを、もう一度、ご自身の集まりに招いてくださいました。そして、そこに聖霊が降って、最初の教会ができたことを、新約聖書は伝えているのです。

2 交わり（コイノニア）とは

「教会」は「エクレシア（集会）」という言葉ですが、新約聖書の中で「交わり」と訳されている言葉は、通常は「コイノニア」という文字が書いてあります。わたしたちの教会で交わりコーナーが「コイノニア」と呼ばれているのは、まさしく交わりがコイノニアだからです。日本語で言っているかギリシャ語で言っているかの違いだけで、コイノニアという呼び名は、その意味を言えば「交わりコーナー」ということなのです。

この「交わり」は、教会について説明した中で申し上げたように、イエス様が招いてくださり、イエス様と結びつくことによって生まれる交わりです。この交わりのことは、よく十字架になぞらえて説明されますが、十字架には縦の棒と横の棒が組み合わさって十字架の形になっています。あの十字架の形のように、教会の交わりには、イエス様から招かれてイエス様と結びつく縦の交わりがまずあり、そして次に、一緒にイエス様に招かれている者同士の横の交わりもあると説明されます。そしてその二つの交わりは、お互いに別々のものではありません。

もし自分が個人的にイエス様に結びつくのだと思うならば、横の兄弟姉妹の交わりなど考えずに、ただ縦方向だけで良いと考える方がいらっしゃるかも知れません。ですが、それはわたしたちを招いてくださったイエス様の思いをまるっきり無視した、自分自身の思い込みでしかありません。なぜなら、イエス様はあなただけを招いて個人的な内弟子とした訳ではないからです。イエス様が個人的な内弟子として誰かを特別にお招きになったのであれば、自分は縦方向だけの交わりで良いと言える人もいるかも知れません。でも実際には、そうではないのです。

よみがえりのイエス様が一番弟子のペトロを招かれたときに、イエス様は、ペトロが三度、イエス様のことを「知らない」と言ってしまった失敗を上書きするかのようになり、三度、ペトロに「わたしを愛するか」と尋ねてくださいました。そして、ペトロが三度、イエス様のことを愛していると返事をすると、その度ごとに「わたしの羊の世話をするように」とおっしゃって、教会の群れの中でお互いに仕えるべきことを教えてくださっています（ヨハネによる福音書21章15節、16節、17節）。一番弟子のペトロでさえ、イエス様の個人的な内弟子ではなくて、教会の交わりの中で、互いに助け合い、支え合って生きるように、イエス様は招いてくださいました。

すると、教会の交わりの中では縦の交わりだけがあるのではないのです。イエス様が皆さんの名前を呼んで愛してくださったように、そのお隣におられる兄弟姉妹たちのことも、名前を呼んで愛しておられ、イエス様につながって生きる教会の交わりの中で生活するようにと招いておられます。どのキリスト者も、自分だけがキリスト者となっている訳ではなく、また、どこの土地にある教会も、その教会だけが教会として建っているのではないのです。

皆が等しく、イエス様から名前を呼ばれ、「わたしがあなたと共に歩んであげよう。わたしと共に生きる者となりなさい」と招かれて、教会の交わりの中に立つ者とされています。使徒パウロは、自分たちこそが正当だと言い合って仲間割れをしていたコリントの教会に宛てて、教会の交わりが決して、「自分たち」のものではないことを教えるために、こんな書き出しの手紙を書き送りました。

コリントにある神の教会へ、すなわち、至るところでわたしたちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々へ。イエス・キリストは、この人たちとわたしたちの主であります。

(コリントの信徒への手紙一
1章2節)

コリント教会に集められているキリスト者たちは、確かに一人ひとりが真剣に、自分こそが正当なキリスト者だと言い合って互いに反目し合っていました。けれども、神様の教会の交わりは皆と共に生きる生活であることを、この手紙の書き出しは教えようとしています。即ち、コリントの教会の中で、自分はケファにつく、自分はパウロにつく、自分はキリストにつくと言い合って、自分こそが正当なキリスト者だと思っている人たちに向かってパウロは書き送るのです。彼らが自分たちだけで神の教会の生活を生きている訳ではなくて、世界中の至るところで、イエス様によって呼び集められ、イエス様を慕い求めて生きているすべての人たちが、全体としてただ一つのキリストの教会としてある。コリントの人たちも、その大きなキリストの体としての全体教会の中であって、イエス様に招かれ召されて聖なる者たちとしての生活をするようになっている、だからあなたがたも、それぞれの立場を越えてコリントにある神様の教会の肢々の一人なのだと、パウロは言うのです。

★

教会の交わりが、そんな風に、個々人の思いの強さや熱心さにあるのではなくて、皆が主イエスに招かれて教会の交わりに生きているということを知る時に、教会の交わりの辛抱強さが生まれてくることになると思います。

先ほど、ファンクラブや同好会と比べて教会の話をしました。教会の交わりは、ああいったこの世の交わりとはずいぶん違うところがあるのだと申し上げましたが、頭である主に招かれてわたしたちがこの教会に共々に集っていると知るところでは、交わりに対する辛抱強さが生まれてくるのです。

どういふことかと言いますと、この世の交わりでは、自分の憧れや興味といった人間的な欲求がその人を交わりに向かわせるエネルギーですので、自分の気に入らないことに出遭ったり、自分自身が弱ったりしてエネルギーが失われてしまうと、それ以上、交わりを続ける意欲を失ってしまいます。人間の欲求や力には限界がありますから、そこで障害にぶつかり、それ以上交わりを持つのが嫌になってしまうのです。人間の世間では、そんな風にして交わりから身を引くということがしばしば起こります。またその結果、その本人がどんどん孤独になるということも起きてきます。

自分中心に生きるのが当たり前の罪人は、自分中心でなければ気が済まないという自己中心性のために、最終的には孤独になり絶望せざるを得ない人生を生きています。しかし教会は、そういう罪人を憐れみ、自ら十字架に掛かってくださり、人間の肉の人生の惨めさを味わいながら罪を清算してくださった主イエス・キリストが「あなたと共に生きよう」とおっしゃってくださった招きが中心にあります。そのために、弱って孤独になりそうな方向に向かっていく兄弟姉妹たちを憶え、主が共にいてくださる教会の交わりの中に、何とかしてつ

なぎとめようとする努力が払われることになるのです。

以前から毎年一回、お誕生日を迎える度に、教会からお誕生日を祝い、神様の御前に生かされていることを感謝して祈ることをお知らせするお便りが発送されていました。あれは、現在、礼拝においでになっている方だけではなくて、教会員であれば可能な限り全員に出しています（一部住所が分からなくなって出せなかったり、心の病を悪化させない配慮のために出さずにいる人はいます）。年を取り、礼拝から遠ざかっている、教会の群れの中では、その人のことが忘れられてはならず、イエス様がその人とつながっていることを、教会は、そういう形で表わしているのです。

★

教会はキリストによって呼び集められた者たちの集いであり、従って、キリストが働かれることによって造られて行きます。けれどもそれは、今の時には、イエス様が弟子たちに約束してくださった助け主、つまり聖霊が働いてくださることで教会の交わりが形づくられます。イエス様が共におられることを信じない教会外の人たちは、キリストという名前を人間が勝手に使いながら、結局、人間の思いつきややりたい放題を行っているに過ぎないと誤解することがあるかもしれません。

しかし実際に、復活の主イエス・キリストは教会の頭として、ご自身の体なる教会の群れと共にいてくださる。その姿は肉眼には見えないけれども、聖霊の働きを通して主を信じる者たちを用い、教会の交わりを建てさせ、終わりの日に主イエス・キリストとお会いする希望を与え、今の時代にはキリストの体としての働きを行わせてくださるというのが、教会が長く信じてきた信仰です。テサロニケ教会に宛てた手紙の中で、使徒パウロがこんな感謝を語っています。

しかし、主に愛されている兄弟たち、あなたがたのことについて、わたしたちはいつも神に感謝せずにはられません。なぜなら、あなたがたを聖なる者とする “霊、の力と、真理に対するあなたがたの信仰とによって、神はあなたがたを、救われるべき者の初穂としてお選びになったからです。

（テサロニケの信徒への手紙二

2章13節）

おまけ

《過去5年間の教勢の分析》

定期教会総会の準備のため、昨年の歩みの振り返りをしていた時、役員会の中で、礼拝出席の減少について話題に上りました。

言われてみると気になって、確認してみました。すると、最近5年間の礼拝出席者数は73名→74名→69名→67名→54名となっていて、大まかな傾向を言えば、漸減傾向にあると言えるかも知れないと感じたのでした。

この理由を考えてみました。この5年間で14名の方々が主の御許に召され、また11名の方々が現在入院中もしくは、施設や家からの禁足に近い状況にあり、県外に引っ越した方も1名、4名の子どもたちが就職・進学などで山梨を離れています。他方、新たに生まれてきた子どもたちもいますし、洗礼を受けたいと志して準備している方もいらっしゃいますので、そのことを考えると礼拝出席者数は、まさしく愛宕町教会のここ数年の状態をそのまま映し出していることに気づかされました。

大事なのは、数の指標を見て不安がることではなくて、わたしたちが礼拝をささげて生きる信仰生活が、平らに感謝して生活できるかどうかということなのだと思われています。教会生活と交わりがそのように神様への感謝のうちに平らに持ち運ばれることをお祈

りしてこの発題を結ぼうと思います。祈りましょう

◆◆◆◆

《分団協議のまとめ》

第1班 雨宮 健

6名参加。交わりコーナーについては、元のように戻るとは難しい。軽い会話や雑談、コーヒーでも飲みながらという辺りから始めてはどうか。

第2班 雨宮恵子

6名参加。

*今日の昼食については、ごく自然に食事をしていた。

*コロナ対策について

(1)教会の方が一般より厳しい。役員会が厳しいのでは。

(2)教会によっては、マスクをしないところもある。

*コイノニアを再開するとしたら

(1)今まで通りは難しい。

(2)責任者を決めておいた方が良いのではないか。

(3)毎週行うのか。回数を考えた方が良い。

(4)簡単なものから考える。コーヒーを飲むだけでも良いかな。

(5)愛宕町教会のコイノニアは他の教会から羨ましがられている。

(6)コイノニアは大切。一人一人を育てる。

第3班 宮澤陽美

5名参加。教会の交わりということについては、交わりの中で教会生活を生かされていることを感じている。その中で、コイノニアについて話が終始した。今日の食事は本当に違和感なく、皆で食事をしていることが嬉しかった。愛宕町教会らしさを感じた。コイノニアを再開したいというのが殆どの人の意見だったが、食事でなくても良いという意見もあった。新来会者については、コイノニアの中で話をする機会もあったので、交わりの時間を復活させたい。

第4班 弓田覚志

6名参加。宍戸先生の講演後、お聞きした話をもとに、思ったことを話していただいた。

*新約聖書でイエス様はよく説教後交わり共に飲食をしていた。共に飲食をして、語り合うことは、お互いの輪を深めていくことで、大切なことだと思う。今まで愛宕町教会は、そのようにして教会員の仲を深めて、教会が強くなっていった。交わりがないと、自分だけの教会になってしまう恐れがある。早くコイノニアが再開され、少しずつでも以前のような共に交わる教会に戻ってほしい。

*コロナウイルスが感染拡大したことは、悪いことばかりではない。神様に向き合う時間をくださった。それにより信仰を深めてくださった。頂いた時間を感謝し、十分に生かし、有効に使うようにしていきたい。礼拝に出席することが、神様、教会員との交わり。その後のコイノニア等の飲食はプラスアルファの交わり。

*交わりコーナーがあることで、新来会者とも交わりができる。

*コイノニア等の交わりについては少し話がずれるが、教会学校での夏季キャンプや、マス釣りバーベキューなどがコロナの影響でなくなったことで、楽しくいろいろな人と交わる機会がなくなりさみしい。来年は復活してほしい。

短い時間だが、皆さんよく話してくださった。コロナウイルス感染拡大により、今まで当たり前前にしていたことが出来なくなり、あらゆることが規制され、苦しい、つらい思いもしているが、その逆に「楽」を覚えた気もする。それによってあらゆることに対し「逃げ」が始まる。人間、一度「楽」を覚えると、なかなか元に戻すのは大変だと思うが、「楽」な教会生活を、コロナ前の当たり前の教会生活に戻れるよう、少しずつ動き出しましょう。

第5班 井波忠志

6名参加。わたしの考えとして、「コイノニアが必要かどうか」、そして「できるかどうか」ということを中心に話を進めた。

コイノニアの必要性は、皆さんが100%必要であるという意見だった。ただ、今まで通りの毎週の食事というような形に捕らわれてしまうと再開できないと思うので、希望者を募り、「コイノニア再開委員会」を作り、その中でどのように再開していくかを考えてはどうか。

あまりハードルを高くしすぎずに、コーヒータイムにするとか、あるいは買って来たものにするとか、毎週は無理でも月一度でもというような、内容的な事柄を「コイノニア再開委員会」で案を出してもらうことが、まずは現実的ではないか。

今日は久しぶりに集って食事をしたが、皆さんからは、「本当に楽しかったし、嬉しかった。コイノニアは必要である」という意見だった。

第5班のメンバーからは、全員が委員会の委員になっても良いという心強い言葉をいただいた。

第6班 古屋秀樹

4名参加。コイノニア再開について、話が終始した。

穴戸先生のお話を聞いて、3年半コイノニアはなかったが、教勢が減少したのはコイノニアが無かったからではないことが分かった。

しかしそれでも、コイノニアは必要。それは、先生のお話の後半で語られた縦軸と横軸の、その横軸で、私たちが神さまに招かれ互いに支え合うという教会員の交わりを作るために、これまでコイノニアの交わりの中で、食事をしながら語り合ったり知り合うことが支え合いだったので、それを回復することはやはり必要である。

ただ、毎月は無理だろう。負担感、婦人会のアンケート結果からも人手が減っていることが示されている。それでも、礼拝後12時近くであれば、お茶とお菓子ではなく、やはり食事を、月に一度程度再開したい。

◆◆◆◆

讃美歌358番を賛美し、穴戸牧師の祈りをもって散会。

(3)10/29、11/19 交わりコーナー テスト再開報告、交わりコーナー再開実行委員会 (宣教・総務)

★実施日 10月29日礼拝後

11月19日礼拝後

★奉仕者 各回、募った有志

★メニュー カレーライス、(副菜=福神漬、白菜の浅漬/もやしナムル)

★調理手順 材料を事前にカットして持ち寄り、午前8時半より調理開始。余裕で調理出来た。辛口40皿分、甘口10皿分を、ほぼ完売した。

★料金 普通250円、小盛200円。子ども、学生、新来会者無料

★感想

＊喜んで準備している。協力体制が感じられ感謝。

＊前のカレーより隠し味もきいて美味しい。

＊多くの舌に好まれる味だった（辛かったという感想もあり）。

＊新米のお米が美味しかった、沢山炊くことの美味しさ。

＊交わりの時はうれしい。次回に期待！

＊月1回でも実施出来れば嬉しい。

＊神様によって集められ、共に祈り、共に食事をする喜び、取り戻したい。

＊皆さん喜んでいて。テーブルの配置を考えて、交わりやすくしてほしい。

＊みんなで作る楽しみを久しぶりに思い出した。後片付けも最後まで何人も残ってくれて感謝。

＊作る手順もスムーズで、3年のブランクを感じなかった。

＊カレーを入れるタイミングは要検討。

(4)植樹20年 愛宕町教会ヒノキ林の現状報告

植樹から20年経過した教会のヒノキ林の状況を知るために、険しい山道を登り、調査した。

調査日 2023年10月18日 午後1時半～

調査者 雨宮 健、清藤城宏

調査場所 末木今朝夫兄所有地愛宕町ヒノキ林
(甲斐市吉沢外道地内)

ヒノキ植栽

2003年5月、教会員総出でヒノキ苗約200本を植栽した。

調査結果と考察

現在樹齢20歳（年）、何本か抽出して測った平均胸高直径は22cm、平均樹高14m、現在の立木数約90本、県が予想している20年生のヒノキより直径では10cmも太っており、樹高も約5mも高かった。これは土地が肥えている証拠である。

ただし土地が痩せている上部で50%近く減ったのは残念だった。枯れ枝も目立つが、自然に任せても今後順調に育つ予想である。

以下、CO₂の吸収予測と、利用できる材の予測を清藤兄に計算してもらった。二酸化炭素の吸収量を計算すると年間1.6トンの削減に貢献していることが分かった。

また、伐採収穫出来る30年後（2053年50年生になる）の成長予測から材の利用できる量は、平均的建築であれば100平方メートル（約30坪）分の教会建築物に使用できるようになることが分かった。

(雨宮 健報/農事山林部担当)

更なる成長を楽しみに！

(5)教会学校幼小科「ひよこ礼拝と分級」を行っています

ひよこは、2018年4月に「ひよこ分級」として月1回でスタートしました。その後、2020年9月から「ひよこ礼拝と分級」と名称を改め、2021年7月には月2回となり

ました。

「ひよこ礼拝と分級」は、讃美とお祈り、また、聖書の箇所にあわせた絵本を用いたり教師がかいた絵を使ってお話をする礼拝と、工作や迷路やクイズで遊ぶ分級とをあわせて、毎回楽しく行っています。

現在、小学生と幼児3人がメンバーですが、これからもっとメンバーが増えていくと期待しています。どうぞ、お祈りください。

(渡辺春美報／教会学校校長)

(6)青年会・教会学校中高科 神学生をお招きして、例会を開催

2021年5月に長手陽介牧師(2017年夏期伝道実習生、現泉高森教会牧師)を例会にお招きして以来、昨年度と今年度は、それぞれ3名ずつ、計6名の神学生をお招きし、お話を聞く機会を与えられた。2022年度は5月29日、7月31日、10月30日、2023年度は4月30日、7月30日、10月29日、いずれも礼拝後に行われた。

昨年度は成 智圭、廣瀬祥史、小倉裕子神学生、今年度は杉田流司、菊地麻祐、船津光國神学生に例会の奨励と夕礼拝の説教をお願いした。青年たちが神学生と親しく話しをし、交流する様子が見られ、お弁当と一緒に食べることを通しても交わりの機会を与えられた。今年度最後の会はコイノニアの再開日に重なり、改めて食卓を共に囲む幸いを味わうことをゆるされた。

すべての会を教会全体で覚えていただき、例会への参加をもって励ましていただいたことを感謝したい。また教会学校には全面的なサポートをいただいた。主に招かれ、福音宣教の志を与えられている神学生と若い方々が出会い、信仰生活を改めて考える機会になればと思っただけだったが、若い方々だけでなく、参加してくださったそれぞれが神学生との出会いを新鮮な思いで受けとめることができたのではないかと思う。

神学生を送り出してくださった東京神学大学に感謝すると共に、改めて神学校を支える思いを与えられた。

(宍戸尚子報／青年会担当)

(7)編集後記

▼本号は今年度の全体研修会とその分団協議の報告を中心に掲載しました。

▼交わりコーナーの試験的再開は、皆さん大歓迎でした。神から託された教会の使命、教会の伝道の働きが、食べて交わり、そして新しい人を迎え入れようと元気をもらったらいいですね。クリスマス祝会に期待！(K.S)